

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 2 日現在

機関番号：37119

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370719

研究課題名(和文)協働的アクション・リサーチによる、中1入門期の英語教育に関する総合的研究

研究課題名(英文)An Analysis by Collaborative Action Research on English Language Education during the First Term of the First Year in Junior High School

研究代表者

横溝 紳一郎(YOKOMIZO, SHINICHIRO)

西南女学院大学・人文学部・教授

研究者番号：60220563

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：佐賀県吉野ヶ里町立三田川中学校1年生の入門期(最初の1学期)の「ゆるやかな移行」と「適度な段差」を意識した英語指導方法を、福岡県福岡市の中学校教員が各自の教育現場で試みた。

その結果、実施した教員が、(1)できるだけ、その通りにやってみようとするタイプと、(2)あまりオリジナルにはこだわらず、自分なりにアレンジしてみようとするタイプ、の大きく二つに分かれることが明らかになった。

この結果は、Teacher Training 式の教師研修に対する現職教員の反応の分類に関する示唆を与えられられる。

研究成果の概要(英文)：Junior high school teachers in Fukuoka City have experimented the teaching methods for English classes conducted at Mitagawa Junior High School in Yoshinogari during the first semester of the first year.

As a result, it became clear that the teachers can be classified into two types: (1) those who want to follow the method exactly, and (2) those who want to arrange their teaching method without caring about the original Mitagawa way.

This result implies the possible classification of teachers' reaction towards Teacher Training.

研究分野：教師教育学

キーワード：小中連携 協働性 アクション・リサーチ

1. 研究開始当初の背景

2010年度～2012年度科学研究補助金基盤研究(C)「小中連携の英語教育における教員間の「協働性」に関する総合的研究」(課題番号22520568)では、外国語教育における小中連携を推進するための最も現実的な方法は「中学1年生の入門期(最初の1学期)に、中学校教師がつながりを意識して、授業を行うこと」であるという結論に至り、佐賀県神埼市吉野ヶ里町立三田川中学校の入門期の授業を録画・分析した。

佐賀県吉野ヶ里町立三田川中学校の入門期の授業を分析した結果、「ゆるやかな移行」と「適度な段差」を意識した授業デザイン・運営が、生徒の英語力及び学習意欲の向上に大きく貢献することが明らかになった。「ゆるやかな移行」と「適度な段差」の具体的な実現方法は、以下のとおりである。

「ゆるやかな移行」

(1) 指導過程の共有

「挨拶 ウォーミングアップ 活動 振り返り / 共有 挨拶」という小学校での指導過程を、中学校も基本的に踏襲する。

(2) 学習活動・手法の共有

小学校でよく行われている「歌・チャンツ」や「TPR」「カルタ取り」などの手法を、中学校でも発展的に実施する。

(3) 言語材料の共有

新文型導入の際には、小学校における外国語活動で使用した構文や単語を活用し、使用場面を思い出させたり意識させたりすることにより、「これまで聞いたことがある・初めて聞いたことでもなんとなく分かる」状況を設定する。

(4) 学習形態の共有

小学校で多く取り入れられている、ペアやグループでの活動形態を、中学校でも多く取り入れる。

(5) 英語を学ぶことを通して身に付けさせたい素地の共有

小学校のときに培った「言語や文化、人に対する体験的な理解・受容」を基礎として、中学校ではさらにそれを深化・拡大する。

「適度な段差」

(1) 帯学習(基礎トレーニング活動)における「適度な段差」

使用する構文に既習と未習を組み合わせることにより、生徒は内容を推測しながら取り組み、同時にその新出構文に気付き、量に慣れていくことをねら

う。

Assistant Language Teacher による「Today's Topic」

「聞くこと」による内容把握、新出構文への気付きを促す。談話を段階的に増量し、Today's Topic 後には、その内容に関連した会話練習を行う。

Chants

繰り返し口ずさむことによって新出構文への慣れや、構文や表現の習得を促す。使用構文の難易度を徐々に上げていく。

1 分間トーク

タスクカードを基に、慣れてきた既習の言語材料を用いて、ペアで30秒～1分間話し続ける活動。

(2) 音読活動における「適度な段差」

語彙指導の際の音読活動における適度な段差

単語カードが自力で読めるかを確認した後にリピート練習をさせる。また英語の歌は音のかたまりとして導入しリピート練習をした後、歌詞を自力で音読させる活動を設け、文字と音が徐々に連結していくことをめざす。

教科書の音読の際のタスク読みにおける適度な段差

音読活動における段差幅を、生徒自身が「音読用ワークシート(教科書本文の一部の表現を虫食い状態にしたものであり、難易度レベル別に3～4種類ある)」を選択したり、read and look up / shadowing / ドラマ読みなどの「タスク読み」の方法を選択したりすることで、自分でレベルを調節しながら音読に取り組み、主体的に表現を習得するよう促す。

このような「ゆるやかな移行」と「適度な段差」を福岡県福岡市の中学校で実施することで、「ある一つの教育指導方法が環境の異なる教育現場でも同様の成果を挙げるのか」を明らかにするために、研究を進めることにした。

2. 研究の目的

以下の点を明らかにすることが、本研究の目的であった。

(1) 三田川中学校で成果を挙げた「ゆるやかな移行」と「適度な段差」は、異なる教育環境で同様の成果を挙げる事が可能な

のか

- (2)その可能性に影響を与える要因は何なのか
- (3)各教員は、三田川中学校式の教え方にチャレンジする中で何を考えているのか
- (4)その考えが、どのような言動となって表れ、それが結果にどう影響を与えるのか

3. 研究の方法

2014年度及び2015年度の中1入門期(4月~7月)に、中学校教員(2014年度は2名、2015年度は5名)が、上掲の研究テーマに関する協働的アクション・リサーチを実施した。データ収集は、(1)毎回の授業が終了した後、各自の気づきを記録したジャーナル、(2)中学校教員と調査代表者とで構成するメーリングリストでのメールのやり取り、(3)中学校教員に対する半構造的インタビューの内容、により行った。このようにして得られたデータを総合的に分析した。

4. 研究成果

三田川中学校の小中連携の基本理念である『ゆるやかな移行』と『適度な段差』という教育理念に基づき、中1担当教員が自身の現場の状況の中で、小中連携のあるべき姿について模索し続けることに関して、実施教員が大きく二つに分かれることが分かった。それは、(1)できるだけ、その通りにやってみようとするタイプと、(2)あまりオリジナルにはこだわらず、自分なりにアレンジしてみようとするタイプ、であった。サンプル数が少ないため一般化することは困難であり、二つに分かれる理由も未だ不明確ではあるが、Teacher Training 式の教師研修に対する現職教員のタイプのパターンが明らかになった点は、本研究の成果として評価できると考えられる。

[Teacher Training と Teacher Development]

教師の育成方法に関して、教師として必要だと思われる技術を指導者が訓練により教え込みマスターさせることで教授能力を伸ばしていこうとする「教師トレーニング(Teacher Training)」という考え方が、1980年代までは主流を占めていました。しかしながら、現在の教師育成は、「教師の成長(Teacher Development)」という方向性で実施されるようになってきました。この方向性は、「教師養成や研修にあたって、これまで良いとされてきた教え方のモデルを出発点としながらも、それを素材に<いつ、つまりどのような学習者のタイプやレベル、ニーズに対して、またどんな問題がある場合に>、<なぜ、つまりどのような原則や理念に基づ

いて>教えるかということ、自分なりに考えていく姿勢を養い、それらを実践し、その結果を観察し改善していくような成長を作りだしていくことを重要視するものです。換言すれば、教師を育成していく段階で、「自己教育力」を身に付けさせようとする方向性が、現在の教師育成の主流である、ともいえるでしょう。(横溝 2006: 44 より引用)

横溝紳一郎「教師の成長を支援するということ」春原憲一郎・横溝紳一郎編著『日本語教師の成長と自己研修：新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして』凡人社、44-67.(2006)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- (1)横溝紳一郎「優れた教師からの学びを、自分自身の実践にどう活かすのか - 上級学習者への発音指導で、授業と家庭学習のつながりを求めて - 」『言語教育実践イマ×ココ』No.2, 96-106.(2014)
- (2)横溝紳一郎・森篤嗣・斎藤ひろみ「実践の共有のために - 学校教育・英語教育からの示唆 - 」『言語教育実践イマ×ココ』創刊号, 5-14.(2013)

[学会発表](計6件)

- (1)横溝紳一郎・嶋田和子・羅曉勤「学習者が満足する授業のために、教師は何が出来るのか」NINJAL 国際シンポジウム(2016年1月23日、国立国語研究所)
- (2)横溝紳一郎・前田範幸・中村真帆・徳久君恵・曾根崎浩二・松田由紀子「中1入門期における協働的アクション・リサーチ(2) - 教育理念の共有によって生み出されるもの - 」日本教育アクション・リサーチ・ネットワーク全国大会(2015年10月11日、神奈川大学)
- (3)河野俊之・斎藤ひろみ・横溝紳一郎「学びの場としての『実践の共有』には何が必要か - 音声教育における実践をもとに考える - 」日本語教育学会春季大会、(2015年5月30日、武蔵野大学)
- (4)YOKOMIZO, Shinichiro「Collaborative Action Research」Ministry of Education Language Centre Japanese Department (2014年9月3日、Singapore)
- (5)横溝紳一郎「アクション・リサーチの可能性と課題」日本教育アクション・リサーチ・ネットワーク全国大会(2013年10月20日、高知県立大学)
- (6)宮内朋子・佐野正之・横溝紳一郎・山田智久・長崎政浩「教室で成長する英語教師

- リフレクティブな授業改善の手法の可能性と課題 - 」全国英語教育学会大会，
(2013年8月11日，北海学園大学)

〔図書〕(計1件)

(1)横溝紳一郎「ことばの教師の育成について」神吉宇一編著『日本語教育学のデザイン』凡人社，180-181.(2015)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

横溝 紳一郎

(YOKOMIZO SHINICHIRO)

西南女学院大学・人文学部・教授

研究者番号：60220563

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：